

『万葉集』から見る
日本の古典 5
磐姫皇后
獨協大学特任教授 城崎 陽子



伊予の湯 (現在の愛媛県松山市道後温泉)

先回は『万葉集』の磐姫皇后歌を取り上げ、夫・仁徳天皇に対する愛情深い表現をみた。一方、『古事記』や『日本書紀』においては、磐姫皇后は嫉妬深い人物として語られている。この人物表現の差異は何に由来するものなのか。今回はその手がかりとなる磐姫皇后歌の異伝歌（伝承が異なる歌）と左注を読み解いてみたい。まずは、以下に異伝歌と左注を示す。

古事記に曰く、
輕太子、輕太郎女に
好けぬ。故にその太子
を伊予の湯に流す。こ
の時に、衣通王、恋
慕に堪へずして、追ひ往
く時に、歌ひて曰く、
君が行き
日長くなりぬ
やまたつづの
君へ行かむ
待つには待たじ
「ここにやまたつといふは、
これ今の造木をいふ」
(巻二・九〇番歌)

記と類聚歌林と説ふ所同じくならず、歌主もまた異なり。因りて日本紀に檢すに曰く、「難波高津宮に天の下治めたまひし大鷦鷯天皇の二十二年の春正月、天皇、皇后に語りて、八田皇女を納れて妃とせむとしまふ。時に、皇后聴しまつらず。ここに天皇、歌よみして、皇后にをひたまふ「云々」。三十年の秋九月、乙卯の朔の己丑に、皇后紀伊國に遊行きて、熊野の岬に至り、その御鋼葉を取りて還る。ここに、天皇、皇后の在らぬを伺ひて、八田皇女を娶りて宮の中に納れたまふ。時に、皇后、難波の済に至りて、「天皇八田皇女を合しつ」と聞きて大く恨む「云々」といふ。また曰く、「遠飛鳥宮に天の下治めたまひし雄朝幡稚子宿禰天皇の二十三年の春三月、

甲午の朔の庚子、木梨輕皇子を太子となす。容姿佳麗にして、見る者自に感ず。同母妹輕太皇皇女もまた艶妙し「云々」。遂に篇かに通けぬ。乃ち十四年の夏六月に、御美の汁凝りて氷となす。天皇異しびて、その所由を卜へしめたまふ。卜ふる者、「内覽あり。けだし親々、相好」けたるか「云々」とまうす。よりて太皇皇女を伊予に移したまふ。といふ。今案ふるに、二代二時に、この歌を見ず。冒頭の歌にピンときた方は記憶力の良い方だ。当該歌は、先回紹介した磐姫皇后歌の一首目と異伝の關係を持つている。歌の意味は、先回紹介した八五番歌が「迎えに行こうかしら、待つていようかしら」と逡巡する様子か「迎えに行かないで」と積極的な姿勢がみえる点が異なっている。

さて、他にどこが異なっているか、じっくりとみてみよう。まず、歌の成立事情が異なっている。『古事記』に同母の兄妹である「輕太子」と「輕太郎女」が關係を持ってしまい、それを罪として太子を伊予の湯に流したという。この時に、衣通王は恋慕う心が抑えきれず、太子を追って行った九〇番歌はその時詠った歌だという。『古事記』の所伝と八五番歌の示す事情が異なることを「古事記と類聚歌林と説ふ所同じくならず、歌主もまた異なり」と左注の冒頭は語っているのである。

ところで、左注を記した編者はこの不審をそのままにできなかった。「因りて日本紀に檢す」とい、正史である『日本書紀』を確かめたのである。前半の「八田皇女」を「娶る」件は、仁徳天皇に位を讓つて自殺した異母弟・菟道稚郎子の遺言を仁徳が守るといふ事情が含まれた一件である。と

ところが、この件は、先回にも触れた磐姫皇后の嫉妬によって、一度頓挫したのだ。しかし、仁徳天皇は八田皇女を娶ることをあきらめず、とうとう磐姫皇后が留守の内に宮殿に迎えてしまったという。

後半の件は、允恭天皇の太子であった木梨輕太子とその同母妹の輕太皇女が關係をもつたことが「夏六月にスーブが凍りつく」という怪異現象によって顕かとなり、太皇皇女を伊予に配流したという一件を示している（この際、どちらを配流したかが『古事記』と『日本書紀』では伝承が異なるが、ここでは置いておく。この二つの事件が全く異なる時代の事件であることは天皇の御代の違いによつてあきらかである。ところが、『万葉集』という作品は山上憶良が編纂した『類聚歌林』を経て、この異伝ある歌を一つの作品群に仕立てているのである。歌自体は天皇を

恋慕う抒情にあふれた作品であり、これを磐姫皇后の歌として一群を成していることの意味は大きい。なぜなら、先回も触れた通り、磐姫皇后は前代未聞の嫉妬深い皇后であつたからだ。

ただ、「嫉妬深い」と言うのは、相手に対する愛情の深さの裏返しではないだろうか。そうした一面を歌四首にまとめ上げ、夫を恋慕う皇后像を描き出した山上憶良の手腕たるや見事なものだ。そして、その意図は…。実は、磐姫皇后歌四首がまとめられた経緯には、光明皇后の立后が関わっているという説がある。「臣下の娘から立后する」ということの重大さは、先例をもつて説くべきだったのだろうか。「嫉妬深い皇后」では困るのである。やはり、ここは「愛情深き皇后」でなければならぬ。聖武天皇の侍講を務めた憶良が一肌脱いだというのがおおよその意見が一致するところでもある。

釋迦牟尼世尊

大恩教主 釈迦牟尼世尊

高尾山隆玄護書

繪・橋本豊治

釋迦牟尼世尊

句・菅谷秀文